

パーリ聖典中の信の構造に関する一考察

——動詞形の格支配に注目して——

古川 洋平

1. 問題の提示と本論の目的

パーリ聖典（本論では Vin, 5 ニカーヤをさす）中の信 (<śrad-√dhā) の本質を如何に理解するかは Jayatilleke 1963, 382-400 以来長く議論されてきたテーマであるが、信の動詞形の検討成果は、「実在」「実現」を中核とする具体的な信の内容をはじめとして (Pv, p. 29, Ap II, p. 344, Ja VI, p. 245, etc.), この語をまず「真実 (sacca) だと判断する思考活動」として捉えるべきことを示唆する (Cf. 後藤 2007, 573; 阪本 2008, 110. (⇒2.)). 各用例を整理すると、本動詞形は目的語として acc. (事物／人物 (1 例のみ)) と gen. 形 (人物) を取り、gen. 形 (事物) を取らない (Cp. Ja-a I, p. 123, etc.). 基本となる acc. 支配は RV 以来の dat. 支配の展開上に位置する (Cf. 後藤 2007, 578-575. gen. 形については後述 (⇒3.)). 以下、acc., gen. 形それぞれを信じる場合の意味内容を簡潔に検討した上で、信の成立構造について一言する。

2. acc. (事物) を真実だと判断する／acc. (如来) を信頼する

代表例：①如来が本当に覚っていると信じる (... **saddho** hoti, **saddahati** Tathāgatassa bodhiṃ: iti pi so Bhagavā araham sammāsambuddho ... bhagavā ti. (D III, p. 237, etc. Cf. Sv III, p. 1029, etc., 藤田 1957, 72; 1992, 95-96)), ②相手の言葉 (発言内容) を真実だと信じる (yo paresaṃ vacanāni **saddahetha** yathātathaṃ, ... (Ja III, p. 192. Cf. Thī-a, p. 268.))¹⁾, ③随信行者 = 「これら [眼等の] 諸法を [仏が説示した] ように [無常等と] 信じる」 (ime dhamme evaṃ **saddahati**) 者, 預流者 = 同じ諸法を「知り, 見る」 (jānāti passati) 者 (S III, pp. 225-228), ④在家信者達が如来を仏として信頼する (... saraṇagatā ca te **Buddham saddahanti** Tathāgataṃ. (Ap I, p. 56. Cf. Ap-a, p. 313.))²⁾.

以上①②④から、acc. (事物) を「真実だと判断すること」、acc. (人物) を「信頼すること」という信の基本的な意味が確認出来る。また、③に明らかなように、信じている者はその対象を自ら直観し真実であると確かめているわけではない(従っ

て、信じても誤っている場合もある (Cf. M II, p. 170.)³⁾。

3. gen. (人物) の「言葉等を」信じる

代表例：①Vin 中の妄語戒に関する釈尊の言葉 (pubbe 'va me so bhikkhave satto dittho ahosi, api cāhaṃ na byākāsiṃ. ahañ ce taṃ byākareyyaṃ pare ca me na **saddaheyyuṃ**, ye me na **saddaheyyuṃ** tesam taṃ assa dīgharattaṃ ahitāya dukkhāya. . . . saccam bhikkhave Moggallāno āha, anāpatti bhikkhave Moggallānassā ti. (Vin III, p. 105. ≡ S II, p. 255.)), ②gen. (人物) に ~iti が付随する例 (añño nu te ko 'dha naro pathavyā **saddheyya** lokasmi: na me⁴⁾ piyā ti, (Ja V, p. 219)), ③「そういう私の〔言葉を〕聞かれるべき、信じられるべきである と考えるであろう者達」(. . . tassa mayhaṃ bhikkhave ye sotabbaṃ **saddahātabbaṃ** maññi-ssanti, (M I, p. 227. Cf. D II, p. 346, Ja III, p. 105.)).

①は目連の発言内容が真実 (sacca) であるか否かが主題となっているので (下線部), 目連と同じ状況にある gen. 形 (私=釈尊) を信じないことを acc. (人物) と同じように理解すると文意が不明確になる。このため、文脈上「言葉」に関わる何らかの語を補って理解するのが自然である⁵⁾。②と同様のケースは他に3例あるが (D II, pp. 327-328, S IV, p. 298, 341), 特に②の ~iti (下線部) はその中に me とあり, gen. (人物) 自身の発言・主張内容であることが明確である。①の指摘を考慮すれば、本ケースは事実上、相手の発言内容を信じている可能性を示唆する。

③では信と √sru⁶⁾ の両他動詞が grd. 形で併用されている。grd. 形は acc. を目的語とする構文を前提としており、この例で直前の gen. 形 (人物) を支配する動詞は想定し難い。冒頭の gen. 形 (人物) を所有の gen. と理解し、√man の目的語としての実体詞 (grd. 形を受ける「acc. (言葉)」) が省略されていると見るのが自然である⁷⁾。③から、信の動詞形が取る gen. 形 (人物) は dat. ではなく gen. であると考えられ、信が直接 gen. (人物) を支配する動詞として機能しているとは考えにくいことが分かる (以上から、②は文中で明示されない acc. (言葉) の内容が表われるケースということになる)⁸⁾。

以上、gen. (人物) を信じる場合、実際上その人物の acc. (言葉等) を信じることが意図されている点を指摘した。さらに付言すれば、AB 1.6.11 との共通点として⁹⁾、人には gen. (人物) を直観者として信じる面が認められ (Cf. D II, p. 320, 345, M I, p. 480.), 意図される acc. (発言内容) を自ら直接見た場合、その点に関して gen. (他者) を信じる必要がなくなる点が指摘出来る (Cf. S V, pp. 220-221, A III, p. 39, IV, p. 81.)¹⁰⁾。

(230) パーリ聖典中の信の構造に関する一考察 (古 川)

4. まとめ——信の成立構造について——

人が或る物事を真実 (sacca) かどうか確かめるには、直接見るのが最も確実である。しかし、実際にはその時点で、あるいはそもそも直観出来ないものもある。その場合、人はその対象を信じたり、gen. (直観者) の言葉を信じることになる。この段階で信の対象は信じている者にとって真実に他ならないが、対象を自ら直接見て真実であることが明らかになれば、人はその点に関して gen. (他者) の言うことを信じる必要がなくなる。

- 1) 「言葉」を信じる例は韻文に限られるが、散文には先に ~iti で示された人物の発言内容を tam (sg. acc.) で代用する例が見出せる (D III, p. 8, S II, p. 84)。
- 2) さらに信の例と見なし得る例として S III, p. 113 (Ee Se daheyya; Be, Ce, Spk saddaheyya.) がある。その他 cf. Vibh, p. 371。
- 3) na kho Āḷāro Kālāmo imaṃ dhammaṃ kevalaṃ **saddhāmattakena**: sayam abhiññā sacchikatvā upasampajja viharāmi ti pavedeti, addhā Āḷāro Kālāmo imaṃ dhammaṃ jānaṃ passaṃ viharatī ti. (M I, p. 164); aham etaṃ jānāmi, aham etaṃ passāmi: idam eva saccaṃ, mogham aññaṃ ti. (M II, p. 169) その他、信・直観と真実については本巻掲載予定の堂山 2016 も合わせて参照されたい。
- 4) Ee sā; Be Se Ja-a me. 異読に従い本文を me に改める。
- 5) acc. (事物) を補う註釈例: It-a II, p. 163, Ja-a III, p. 106, V, p. 446. 「言葉」以外の語を補う場合もある点に注意。
- 6) 知覚動詞 √sru の格支配については、cf. AiS, pp. 158–159; von Hinüber 1968, §261。
- 7) 実際、人を信頼する文脈中の上掲例と同様の構文に対し、註釈は acc. (話) を補って説明を加える (D II, p. 74 (Sv II, p. 519)). Jayatilleke 1963, 398; Norman 1991, 188; Rotman 2007, 42–43 は gen. (釈尊) + ~iti の例 (S IV, p. 298) を扱う中で同様の理解を提示し、Gethin 1992, 109–110 は「～と言う gen. (人物) を信頼する」と gen. (釈尊) が間接的な目的語である点を強調する。
- 8) √sru との併用から信を知覚動詞として扱う見方も想定される。中期インド語で RV 以来の知覚動詞の gen. 支配が拡大したことはこれを支持すると考えられるが (Sen 1953, 46ff.), 少なくとも本例で信は acc. 支配を前提とするものとして扱われており、併用例のみをもって知覚動詞としての信を主張することは出来ないと考える (パーリ聖典内では gen. (事物) を取らない点にも注意 (⇒1.))。
- 9) tasmād ācakṣāṇam āhur: adrāg itī. sa yady adarāsam itī āhāthāsya **śrad dadhāti**. yady u vai svayaṃ paśyati, na bahūnām canānyeṣāṃ **śrad dadhāti**. (AB 1.6.11. Cf. Oertel 1994, 446; AiS, p. 142.)
- 10) Cf. 藤田 1957, 77–79; 1992, 100–103. その他 cf. M I, pp. 509–510, S IV, pp. 298–299 いずれの例も信の品詞が確定出来ないが、述語動詞 √gam がしばしば絶対詞を伴う点、名詞形の信の対象は loc. で示される点から、saddhāya を絶対詞形と判断する (Cp. Divy,

p. 17.)

〈略号〉

※パーリ語テキストは Pali Text Society (PTS) 版を底本とする。

- AB *Das Aitareya Brāhmaṇa*. Ed. Theodor Aufrecht. New York: Georg Olms, 1975.
 AiS Delbrück, Berthold. 1888. *Altindische Syntax*. Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses.
 Divy *The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends; Now First Edited from the Nepalese Sanskrit Mss. in Cambridge and Paris*. Ed. Edwald B. Cowell and Robert A. Neil, 1886. Reprint, Amsterdam: Oriental Press NV, Philo Press, 1970.

〈参考文献〉

- Gethin, R. M. L. 1992. *The Buddhist Path to Awakening: A Study of Bodhi-Pakkhiyā Dhammā*. Leiden: E. J. Brill.
 von Hinüber, Oskar. 1968. *Studien zur Kasussyntax des Pāli, Besonders des Vinayapiṭaka*. München: T. Kitzinger.
 Jayatilleke, K. N. 1963. *Early Buddhist Theory of Knowledge*. London: George Allen and Unwin.
 Norman, K. R. 1991. "Dhammapada 97: A Misunderstood Paradox." In *Collected Papers*. Vol. II, 187–193. Oxford: The Pali Text Society.
 Oertel, Hanns. 1994. "Idg. *voīda* „ich habe gesehen“ = „ich weiß.“" In *Kleine Schriften*. Teil I, 445–447. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
 Rotman, Andy. 2007. *Thus Have I Seen: Visualizing Faith in Early Indian Buddhism*. New York: Oxford University Press.
 Sen, Sukumar. 1953. *Historical Syntax of Middle Indo-Aryan*. Calcutta: Linguistic Society of India.
 後藤敏文 2007 「*śraddhā*-, *crēdō* の語義と語形について」『論集』 34: 578–561.
 阪本 (後藤) 純子 2008 「「水たち」 *āpas* と「信」 *śraddhā*- —— 古代インド宗教における世界観 ——」『論集』 35: 110–89.
 堂山英次郎 2016 「インドラへの懷疑と信 —— RV II 12, 5 ——」『印仏研』 64 (2) 掲載予定.
 藤田宏達 1957 「原始仏教における信の形態」『北海道大学文学部紀要』 6: 65–110.
 藤田宏達 1992 「原始仏教における信」仏教思想研究会編『仏教思想 11 信』平楽寺書店, 91–142.

(JSPS 特別研究員奨励費 (課題番号 26781) による成果の一部)

〈キーワード〉 *śraddhā*, *saddhā*, *satya*, *sacca*, 信

(日本学術振興会特別研究員)